



本校が目指す「自律的に学ぶ」とは



わたしたちが、今次研究で目指した子どもの姿は、「自律的に学ぶ」です。

自律的に学ぶ子どもとは

- ・ 問題解決のために、客観的な見方を持ち、よりよいもの（考え）を求め、自分の意志で行動する子ども
- ・ 自分で目標を設定したり、調整したりして、問題を解決する子ども

このような子どもが育つために、わたしたちは、日々の授業実践の中に、次のような要素が必要であると考え、実践してきました。

- ① 自分自身の認識を他者や事象、既習と関連付けること【つなぐ】
- ② いくつかある選択肢の中から、自分自身の考えを基によりよいものを選ぶこと【えらぶ】
- ③ 今、学んでいることやこれまで身に付けた力を使って問題を解決すること【つかう】

そして、各教科等で、具現化にあたっています。



友だちの考えを聞いてつなぐ



最適な考えを選ぶ



既習を使って問題を解決する



子どもたちが「自律的に学ぶ」授業

「自律的に学ぶ子どもが育つ」授業の構成要素



わたしたちは、「自律的に学ぶ子どもが育つ授業」には、授業の中に次の要素が必要であると考えています。それを「つなぐ」「えらぶ」「つかう」の3つの視点に整理しました。

自律的に学ぶ子ども

- ・ 問題解決のために、客観的な見方を持ち、よりよいもの（考え）を求め、自分の意志で行動する子ども
- ・ 自分で目標を設定したり、調整したりして、問題を解決する子ども

構成要素

自分自身の認識を他者や事象、既習と関連付けること

いくつかある選択肢の中から、自分自身の考えを基によりよいものを選ぶこと

今、学んでいることやこれまで身に付けた力を使って問題を解決すること

つなぐ

えらぶ

つかう

3つのキーワード

「自律的に学ぶ子どもが育つ」ために、 学びの文脈をデザインする

資質・能力を育成するためには、教科等横断的に子どもの学びの姿を見取り、評価し指導の改善を進めることが求められます。その際に、わたしたちは、子ども一人一人に「学びの文脈」があると考えています。

授業において、教師一人一人が、他教科・領域との関連を明確にした上で、単元のねらいを基に一単位時間の学びを見通し、それに伴った手立てを組み、実行すること、子どもの付けた力を基にその授業を振り返り、次の時間および他教科・領域の学びの流れを構想し直すこと

子どもの日常経験、これまでの学習活動のつながりとその流れからなる学習活動の連なりの中で、子ども自らが学びの連続性や必要感を感じながら主体的に学んでいる状況



教師が、子どもの学びの文脈をデザインする（指導構想）

子どもの学びの文脈

子どもが、自分自身の学びの文脈をデザインする（授業）

子どもたちが自分自身の学びの文脈をデザインできるように、教師が、きめ細かく指導・支援することは「指導と評価の一体化」につながります。

【教師の役目】

「つなぐ」「えらぶ」「つかう」の3つが授業改善の視点

教師は、子どもの学びの文脈を基に、子ども一人一人が自分自身の学びを「最適になるよう調整」できるように寄り添うこと。



「自律的に学ぶ」機会の保障



詳しくは、研究紀要をご覧ください。研究紀要は学校公開研究会の当日にお配りいたします。紀要申込でもお買い求めできます。